

児童・生徒のコミュニケーションの在り方に関する研究(最終報告)

— 情報ツールが及ぼす影響の分析を通して —

田中 恵美¹ 宇田 川 信²

児童・生徒の人間関係形成能力やコミュニケーション能力の低下が指摘される中、これらの能力育成に対する社会的要請は高い。そこで本研究では、児童・生徒のコミュニケーション能力の育成方法を考案する。まず、児童・生徒の実態からコミュニケーションのとり方を明らかにし、必要なコミュニケーション能力とは何かを探る。そして、その能力を学校の教育活動の中で、意図的に育成するための具体的な方策を提案する。

はじめに

平成23(2011)年8月、コミュニケーション教育推進会議「子どもたちのコミュニケーション能力を育むために～『話し合う・創る・表現する』ワークショップへの取組～(審議経過報告)」(以下、「報告」という。)では、社会構造の変化に伴う価値観・生活パターンの多様化により、地域でのコミュニティ形成が難しい状況にあり、それが、子どもたちのコミュニケーションの在り方に影響を及ぼしていると述べられている。また、報告では、経済協力開発機構(OECD)が「主要能力(キーコンピテンシー)」の一つとして、「多様な社会グループにおける人間関係形成能力」を挙げていることや、企業が学生を採用するに当たって重視する能力として、「コミュニケーション能力」が全ての年度の調査で挙げられていることなども述べられている。これらのことから、子どもたちの人間関係形成能力やコミュニケーション能力の育成に対する社会的要請が高くなっていることが分かる。

教育現場では、人間関係形成に係る活動や言語活動の充実などを通して、コミュニケーション能力の育成を図ろうとしている。しかし、学校の教育活動の中で、コミュニケーション能力の「何を」、「いつ」、「どのように」育成するかについて、教員間での共通理解は十分になされていない。そのため、子どもたちは様々な活動を通して、コミュニケーション能力を身に付けているが、それは副次的であり、その能力に個人差が生じているのではないかと考えた。

研究の目的

本研究では、児童・生徒のコミュニケーションのとり方や情報ツールに対する意識等を分析し、その在り方を明らかにする。そして、これからの社会を生きる

ために必要なコミュニケーション能力を整理し、学校の教育活動の中で、コミュニケーション能力を意図的に育成するための具体的な方策を提案する。

研究の内容

1 研究の概要

(1) 2年間の主な取組

本研究は、平成26年度・27年度の2年間に渡り、これからの社会を生きるために必要なコミュニケーション能力を、小学校・中学校・高等学校の12年間を通して、児童・生徒に意図的に育成する方策を見出すために行った。主な取組の内容は次のとおりである。

1年目は、「平成26年度 コミュニケーションに関するアンケート調査」(以下、「平成26年度アンケート調査」という。)を行った。この調査は、児童・生徒がコミュニケーションをとる際に感じていることやコミュニケーションをとりやすい環境の傾向を探るために、県内の児童・生徒5,391名を対象に、質問紙によるアンケート形式で実施したものである。この調査結果や他のコミュニケーションに関するアンケート調査などの分析を通して、児童・生徒のコミュニケーションのとり方の実態を明らかにした。そこから、必要なコミュニケーション能力とは何かを探り、「児童・生徒のコミュニケーション能力育成に関する観点表」(以下、「観点表」という。)を考案した。

2年目は、1年目に考案した「観点表」を基に、学校の教育活動の中でコミュニケーション能力をどのように育成するかを検証した。調査研究協力員(以下、「協力員」という。)として、県内の小学校・中学校・高等学校から各2名の教員を委嘱した。6名の協力員は、所属校において、検証授業を行った。その他、4回の調査研究協力員会を開催し、研究の趣旨説明や授業づくり、検証授業の分析や協力員への聞き取りなどを行った。

(2) 本研究における「コミュニケーション」とは

コミュニケーションとは、一般的に情報の伝達行為を指すが、その捉え方は様々である。例えば「コミュ

1 教育課題研究課 指導担当主事

2 教育課題研究課 指導主事

ニケーションがとれない」という言葉を聞いた時、「相手にうまく伝達できなかった」と感じる場合と、「相手とうまく人間関係が作れていない」と感じる場合がある。これについて、高橋(2010)は、「コミュニケーションが単なる情報の伝達・共有という物理的な行為にとどまらず、心への働きかけという精神的な作用をともなう行為であることを示すもの」と述べている。つまり、コミュニケーションをとる時、伝え合うという行為以外にも「仲良くなりたい」、「相手のことを知りたい」などの思いが含まれる場合があるということである。

そこで、本研究では、コミュニケーションを「伝え合う」という伝達行為だけではなく、そこに込められた思いも含んだものとして捉えることとする。

2 必要なコミュニケーション能力の整理

(1) コミュニケーションのとり方の傾向

「平成26年度アンケート調査」の分析結果から、児童・生徒のコミュニケーションのとり方について次のような実態が明らかになった。

まず、児童・生徒は、コミュニケーションをとる際、相手がどのように自分の言葉を受け取っているかを意識することが少なく、発信する時の自分の気持ちに重きを置いたやりとりをしている。そのため、自分の言葉を相手がどのように受け取っているか、どのように感じているかといった相手の状況に対する意識が低くなる傾向にあることが分かった。

次に、情報ツールの急速な普及により、ソーシャルネットワークサービス(以下、「SNS」という。)を利用してコミュニケーションをとる児童・生徒が増えている。SNSを活用したコミュニケーションの場は、教室のように様々な人間関係が混在する場と違い、構成メンバーとの親密度や話題の内容などで場が分かれている。そのため、児童・生徒は、自分が参加しやすい場を自由に選ぶことができる。このことから、どのような人で構成されているか、興味・関心があることは何かなど、自分の好みで、コミュニケーションをとる場を選ぶ機会が増える傾向にあることも分かった。

これら二つの傾向には、近年急速に普及した携帯電話やスマートフォンが影響を及ぼしていると考えられる。詳細は、昨年度の中間報告で述べている。

(2) 二つのコミュニケーション能力

「自分の思いを伝えることに意識が強く向く」、「自分の好みに合わせてコミュニケーションをとる相手や場を選ぶ」という二つの傾向は、自分の思いや考えを発信したり、自分の興味・関心がある場に意欲的に参加したりするなど、コミュニケーションや人との関わりに関して、プラスに働くことが考えられる。

反面、これら二つの傾向により、文部科学省「小学校キャリア教育の手引き(改訂版)」(2011)において、

分野や職種にかかわらず、社会的・職業的自立に向けて必要な能力として挙げられている「人間関係形成・社会形成能力」が、身に付かない恐れがある。これらの能力は「多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることができるとともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することができる力である。」と定義されている。

自分の思いを伝えることばかりに意識が強く向いていると、多様な他者の考えや立場を理解しにくくなる。他者の立場が理解できなければ、自分がどのような状況に置かれているかを判断できない。また、自分の好みに合わせて相手や場を選んでばかりいると、多様な他者と協力・協働して何かを成し遂げることに不得意さを感じたり、そのような場を避けたりしてしまう。

そこで、自分の置かれている状況を受け止めるためには、相手の状況を意識してコミュニケーションをとる能力を高める必要があると考えた。また、多様な他者と協働して何かを成し遂げるためには、相手が誰でもあっても、その場の目的に応じたコミュニケーションをとる能力を高める必要があると考えた。

3 学校の教育活動の中で育成するために

本研究では、相手の状況を意識してコミュニケーションをとる能力と目的に応じたコミュニケーションをとる能力が、児童・生徒に身に付いているかどうかの検証は行っていない。しかし、児童・生徒のコミュニケーションのとり方の傾向から見ると、二つの能力は生活の中で育成されにくくなっていると思われる。そこで、これらの能力を学校の教育活動の中で育成する必要があると考えた。

コミュニケーション能力は、学校生活の様々な活動を通して育成され、良好な人間関係づくりや教科のねらいを実現することに活用するものであると、各教科等の学習指導要領解説に記されている。しかし、具体的な育成方法に関しては明記されていない。そこで、本研究では、コミュニケーション能力の「何を」、「いつ」、「どのように」育成し、「どのような姿が見られたら」能力が育成されたかという具体的な方策を示していく。

(1) 「何を」育成するか

ア 「観点表」の構成について

「観点表」は、二つの能力を具体的に示し、コミュニケーション能力の「何を」育成するかをより明確にするために作成した。

「観点表」は、「A相手の状況を意識してコミュニケーションをとる能力(以下、「A相手意識」という。）」、「B目的に応じたコミュニケーションをとる能力(以下、「B目的意識」という。）」の二つの育成すべき

能力と、育成が実現した際の「児童・生徒の具体的な姿」で構成されている。

「観点表」を作成する際、次の2点を考慮した。

まず、校種や学年など発達段階が異なる場合でも、「児童・生徒の具体的な姿」の項目の内容を同一とした点である。それは、項目の内容は、どの校種や学年でも繰り返し身に付けたいものであり、児童・生徒の実態や環境の変化に合わせて学習活動を設定すれば、同じことの繰り返しにはならないと考えたからである。

次に、「児童・生徒の具体的な姿」の文末を、「～できている」ではなく「～に気付いている」や「～を発見している」などにし、授業では、コミュニケーションのとり方に気付いたり発見したりすることを目指した点である。コミュニケーション能力は、その授業だけで身に付くものではなく、学校生活の様々な場面で育成され、繰り返し活用することで身に付いていくものだと考えたからである。

「観点表」の活用については、「A相手意識」と「B目的意識」各5項目の内容を1年間で全て扱うことを想定して作成した。また、10項目を小学校から高等学校までの12年間、どの学年でも繰り返し学ぶことで定着を図ろうと考えた。

イ 「観点表」の項目について

項目の内容は、そのまま授業のねらいとしたり、児童・生徒の授業後の姿をイメージして授業づくりをしたりできるよう具体的に示した。

「A相手意識」の「ア」と「イ」の項目は、まず、コミュニケーションをとる際には、相手によって自分が何らかの影響を与えられているということだけではなく、自分によって相手が何らかの影響を与えられているという、相互作用に気付く必要があると考え設定した。次に「ウ」で、自分にとってコミュニケーションをとりやすい環境と、とりにくい環境があることに気付かせ、「エ」で、相手にとって、コミュニケーションをとりやすい環境かとりにくい環境かを推測させることで、相手の状況に対する意識が高まると考えた。最後に「オ」は、同じ場にいる全ての人がどうしたらコミュニケーションをとりやすいかを考えて

第1表 児童・生徒のコミュニケーション能力育成に関する観点表

育成すべき 能力	項目（児童・生徒の具体的な姿）				
	ア	イ	ウ	エ	オ
A 相手の状況を意識してコミュニケーションをとる能力 （「A相手意識」）	相手が自分のコミュニケーションのとり方に影響を及ぼしていることに気付いている。	自分が相手のコミュニケーションのとり方に影響を及ぼしていることに気付いている。	自分にとっての、コミュニケーションをとりやすい場ととりにくい場の違いを発見している。	相手にとって、コミュニケーションをとりやすい場か、とりにくい場かを推測している。	相手の状況を意識して、コミュニケーションをとりやすい場を考え、自ら作ろうとしている。
B 目的に応じたコミュニケーションをとる能力 （「B目的意識」）	目的や与えられた指示などをみんなで共通理解することの大切さや有効性に気付いている。	目的に応じて、みんなの思いや考えを聞き取ることの大切さや有効性に気付いている。	目的に応じて、みんなの思いや考えを分類することの大切さや有効性に気付いている。	目的に応じて、みんなの思いや考えを一つにまとめることの大切さや有効性に気付いている。	自ら設定した目的に応じて、効果的なコミュニケーションの方法を選択している。

行動することができれば、「A相手意識」が身に付いていると判断できると考え設定した。

「B目的意識」の「ア」から「エ」の項目は、日頃、何気なく行っている話合いの中には、いくつかの方法が混在していることと、それらの方法には、有効な活用方法があることに気付かせるために設定した。また「オ」では、目的に応じた効果的なコミュニケーションの方法を選択することができれば、「B目的意識」が、身に付いていると判断できると考え設定した。

多様な価値観を持つ人たちと協働するためには、「何のために話し合うのか」、「効果的な話合いの方法は何か」など、目的を把握し効果的な話合いの方法を選択する力が必要になると考えた。具体的には、この話合いの場で求められているのは、情報共有なのか、情報収集なのか、情報を整理することなのか、合意形成なのかを判断し活用できる力のことである。

(2) 「いつ」育成するか

「観点表」に示した能力を、いつ育成するかについて考えた時、「よりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる」ことや、「自己を生かす能力を養う」ことを目標とする特別活動に着目した。それは、本研究の目指す「これからの社会を生きるために必要なコミュニケーション能力」は、よりよい人間関係を築いたり、自己を生かしたりする能力であると考えからである。

また、特別活動の目標において、小学校・中学校・高等学校全てに共通している部分は、「観点表」に示した項目を育成することにより実現できると考えた。

まず、「望ましい集団活動を通して」行うという部分である。「望ましい集団活動」とは、「互いのよさや可能性を認め合える」ことであると「小学校学習指導要領解説 特別活動編」にある。互いを認め合う際、「A相手意識」は必要な能力であると考えた。

次に、学級活動（ホームルーム活動）の目標においても「諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度」を育てるという部分が共通しており、「B目的意識」で育成された能力を、諸問題を解決するための手段として活用できると考えた。

これらのことから、本研究におけるコミュニケーション能力を育成することは、特別活動の目標を実現することにつながると考え、特別活動の時間を中心に実践することとした。ただし、コミュニケーション能力は、学校生活の様々な場面で育成されるものであると考え、教科の授業でも実践している。

(3) 「どのように」育成するか

「観点表」に示した能力を育成するには、授業者が何のためにその能力を育成し、どんな成果を期待するのかを明確にする必要がある。また、児童・生徒においては「自分のコミュニケーションのとり方」に気付き、「今後どのようなコミュニケーションをとりたいのか」を考えさせることが、コミュニケーション能力育成につながると考えた。そこで、授業づくりの手順を考える際に注目した点とその理由を次に述べる。

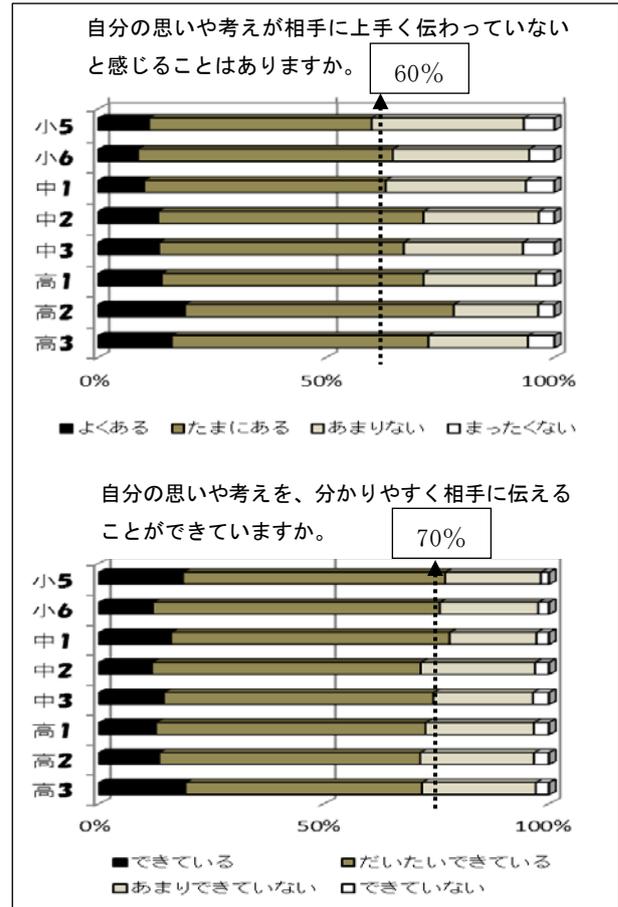
ア 手順を考える際注目した四つの点

第一に、多くの教員が目の中の児童・生徒のコミュニケーションのとり方や人との関わり方に課題を感じている点である。これは、特別活動の時間の実践報告や協力員への聞き取りなどから、「仲の良い友だちとしかコミュニケーションをとらない」や「話合いの時に、参加していない子どもがいる」、「相手の思いを気遣うことができない」など、具体的に課題を挙げることができていたからである。

第二に、どのような能力を児童・生徒に身に付けさせると、教員が感じている課題を解決できるのかという具体的なイメージを教員自身が持っている点である。「自分から積極的に多くの人と関われる」や「みんなが参加できるよう声を掛ける」、「思いやりを持って人と接する」など、能力を身に付けた児童・生徒像を具体的にイメージすることができていた。

第三に、児童・生徒は、自分がどのようなコミュニケーションのとり方をしているかを、客観的に見えない点である。「平成26年度アンケート調査」において、「自分の思いや考えが相手に上手く伝わっていないと感じることはありますか。」という質問にどの学年の児童・生徒も60%前後が「よくある」、「たまにある」と答えている。それと同時に、「自分の思いや考えを、分かりやすく相手に伝えることができますか。」という質問に「できている」、「だいたいできている」と70%前後の児童・生徒が答えている（第1図）。自分の思いや考えを伝えられていないと感じることがあるにもかかわらず、分かりやすく伝えることが「できている」割合が高いという結果であった。この二つの結果から、「自分は分かりやすく相手に伝えているのに、相手に伝わらない時がある」と考える児童・生徒がいることが推察できる。それは、自分が分かりやすく相手に伝えているかを、相手の反応からではなく、自分の感覚で判断しているということである。このことから、児童・生徒は、日頃、自分がどの

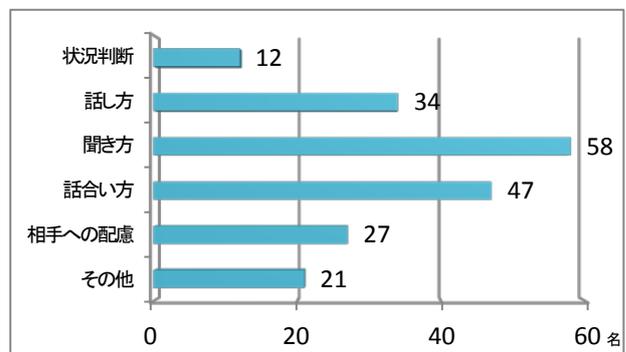
ようにコミュニケーションをとっているかを客観的に見るできていないのではないかと推察した。



第1図 平成26年度アンケート調査(抜粋)

第四に、児童・生徒は、よりよいコミュニケーションのとり方に対する意識が高いという点である。

協力員6名が検証授業を実施する学級の児童・生徒199(小55・中68・高76)名に、共通の事前アンケート調査を行った。その中の「コミュニケーションをとる時に大切だと思うことは何ですか」という質問に対する回答を、いくつかのカテゴリーに分けて集計した(第2図)。



第2図 コミュニケーションをとるときに大切だと思うこと(カテゴリー別)

アンケートを実施した199名中「聞き方」に関する記述をした児童・生徒が多く、「うなずきながら聞く」「相手の話を理解できるように聞く」などの回答があ

った。次に「話し合い方」に関する記述が多く「共通の話題を見付ける」、「楽しく話す」などの回答があった。また、校種や学年にかかわらず記述内容が具体的であることと無回答の少ないことが共通していた。

このことから、よりよいコミュニケーションのとり方や人との関わり方のイメージを児童・生徒それぞれが持っているということが分かった。

イ 授業づくりの手順

注目した四つの点から、コミュニケーション能力育成のための授業づくりを次のような手順で行うこととした。

- 1 児童・生徒の実態から、コミュニケーションや人間関係形成に関する課題を挙げる。
- 2 課題を解決し「こんな児童・生徒（学級）になって欲しい」という目指す児童・生徒像を決め、それを実現するための、実態に合った学習活動を考える。
- 3 授業の中に「児童・生徒が自分自身のコミュニケーションのとり方や人との関わり方を客観的に見ることができる」場面を設定する。
- 4 授業の最後に「今の自分自身のコミュニケーションのとり方や人との関わり方に気付いたところから、今後どのようなコミュニケーションのとり方や人との関わり方をし、学校生活の中でどのようにいかしていくか」を考えさせる場面を設定する。

この手順のポイントは「1」と「3」である。教員においては、目指す児童・生徒像を決める前に、実態から課題を発見する。児童・生徒に対しては、今後どうしていくかを考える前に、自分自身の課題を発見させる。そうすることにより、目の前の児童・生徒に必要な、コミュニケーション能力を育成するための授業づくりができると考えた。

(4) 「どのような姿が見られたら」育成されたか

児童・生徒が、授業でコミュニケーション能力を身に付けることができたかを次の方法で判断する。

まず、授業前と授業後のアンケートの数値の変化を見る方法である。数値の変化には、「授業前よりコミュニケーション能力が高まった」もしくは、「できていると思っていたコミュニケーションについて、授業を通して、できていないと感じた」など、児童・生徒の気づきが反映されると考えたからである。

次に、授業前と授業中と授業後（おおむね一週間後実施）のアンケート及び振り返りの記述の内容から、気づきや変容を見る方法である（第2表）。コミュニケーションに関する新たな発見や、自分自身や他の人のコミュニケーションのとり方に対する気づきなどの記述から、授業のねらいが実現できているかを判断することができると思った。そして、行動の変容に関する質問の回答から、「学校生活にどういかしてい

うとしているのか」と「どのようにいかせたか」が分かり、授業のねらいの定着度も判断することができる。

第2表 アンケート及び振り返りの記述項目

（授業前のアンケート記述項目）

- コミュニケーションをとる時に、大切だと思うことは何ですか。
- 話し合いを進める時に、大切だと思うことは何ですか。

（授業中の振り返り記述項目）

- この授業で、気付いたこと・分かったこと・思ったことなどを自由に書いてください。
- この授業で、気付いたことや学んだことは、生活の中でどのようにいかせると思えますか。予想してみてください。

（授業後のアンケート記述項目）

- コミュニケーションをとる時に、大切だと思うことは何ですか。
- 話し合いを進める時に、大切だと思うことは何ですか。
- 授業で気付いたことや学んだことを、生活の中でいかせましたか。

最後は、授業づくりの際に想定した、授業後の児童・生徒の具体的な姿が実現できたかどうかを、教員が観察することにより判断する方法である。想定した姿は、「授業者から見た、コミュニケーション能力観察表（以下、「観察表」という。）」に授業づくりの際、記入する。

4 検証授業による実践

(1) 実際の授業づくりの手順

検証授業に向けた授業づくりは、協力員6名とも共通して、次の手順で行った。「3(3)イ 授業づくり」で示した手順では、抽象度が高く、実際の授業づくりが困難になると考えた。そこで、より具体的にするために、手順を増やし詳細に示した。

- ① 児童・生徒の実態から課題を見付ける。
- ② 目指す児童・生徒像をイメージする。
- ③ 「観点表」から項目を選び、授業のねらいとする。
- ④ 授業のねらいを実現するために身に付けさせたい力を決める。
- ⑤ 授業後の児童・生徒に期待する変容を「観察表」に具体的に記す。
- ⑥ 授業のねらいや「観察表」に記したことが実現できるような活動を考え、学習指導案を作成する。

検証授業におけるアンケート調査と振り返りについても、共通して次の流れで行った。

事前：コミュニケーション能力を高めるための授業を行うことを予告し、アンケート調査を行う。

当日：始めに授業のねらいを確認し、授業の終わりに振り返りシートに記入させる。

事後：授業後、日を空けてアンケート調査を行い、「観察表」の内容が実現できているか観察する。

(2) 授業の概要

各校種の検証授業の概要は次のとおりである。次の協力員3名の授業の詳細や他3名の授業づくりと検証授業については、実践事例集において述べる。

ア 小学校(3年生)

①実態から見える課題	いつも同じ集団の友達と行動を共にすることにこだわり、他の人と関わることを避ける。
②目指す児童・生徒像	仲の良い人以外とも自らコミュニケーションをとれる児童
③授業のねらい	A相手意識一オ「相手の状況を意識して、コミュニケーションをとりやすい場を考え、自ら作るようとしている。」
④身に付けさせたい力	相手を思いやると共に、相手の状況を意識する力。
⑤「観察表」の記入内容	いつもは行動を共にしない友達の様子を気にかけるようになる。
⑥学習指導案	様々な状況にいる友達にどう声をかけるかを三つの場面を提示して考えさせる。

授業者は、「A相手意識一オ」を実現するために、まず、友達が「頭が痛そうにしている」「一人でこっちを見ている」「本を読んでいる」という三つの場面で、どう声をかけるかを考えさせる活動を考案した。次に、活動の際、「優しく声をかける」や「仲間に入れてあげる」などの行動よりも、相手の思いをくみ取ったり、相手が嫌な思いをしないように考えたりしてから行動することの大切さに気付くようにした。具体的には、「なぜそうしようとしたのか」という理由を授業者が問いかけながら授業を進める展開とした。

当日は、三つの場面で「友達にどう声をかけるか」について個人で考えた後、全体に向けて発表していく形で進んだ。そのうちの一つの「本を読んでいる友達」にどう声をかけるかを考える時は、「声をかける」こと自体が必要かどうかを問う発言があった。その声を授業者が取り上げ、全員が声をかけるかについて、自分の考えを持てるよう意見交換を進めた。その結果、声をかけようとは思わない状況でも、相手の立場に立ってみると、声をかけた方が良い状況もあると気づき、今までとは違う接し方があることに気付いた児童が多かった。

イ 中学校(1年生)

①実態から見える課題	自分の考えを分かりやすく伝えたり効果的に話し合いを進めたりすることが苦手。
②目指す児童・生徒像	集団の中で自分の考えを伝えたり、効果的に話し合いを進めたりすることができる生徒。
③授業のねらい	B目的意識一エ「目的に応じて、みんなの思いや考えを一つにまとめることの大切さや有効性に気付いている。」
④身に付けさせたい力	話し合いの時、合意形成する力と折り合いを付ける力。
⑤「観察表」の記入内容	結論だけではなく、理由に重きを置いて他の人の意見を聞くようになる。
⑥学習指導案	修学旅行の昼食場所を決めるという場面を設定し、多数決で決めることを禁止して、一人ひとりの「理由」に注目しながら話し合い、意見を一つにまとめさせる。

授業者は、「B目的意識一エ」を実現するために、みんなの意見を一つにまとめる方法を示し、生徒に実践させる活動を考案した。それは、みんなの意見の「理由」に注目させるという方法である。

具体的には、「ラーメン屋に行きたい理由は、時間がかからないと思ったからです。」という意見に対し、「時間がかからない」という理由に着目させ、たとえ「ラーメン屋」にならなくても、「時間がかからない」他の昼食場所を考えさせるという、全員の理由を反映させていく方法である。

当日は、生徒が選んだ昼食場所そのものよりも、その場所を選んだ理由に注目できるように、話し合いの前にワークシートに記入させ、話し合う時には、理由を丁寧に扱うように授業者が声をかけた。その結果、普段はあまり意見を言わない生徒が、理由を他の生徒に分かりやすく伝える姿が見られた。その結果、振り返りには、「話し合いは難しい」や「司会は大事だ。自分はずまくできなかった」や「似た意見をまとめることが有効だ」など、話し合いの仕方について、気付いたことや改善したい点についての記述が見られた。

ウ 高等学校(2年生)

①実態から見える課題	みんなの意見や考えを集め、そこから一つの結論を出すという話し合いの技術が身に付いていない。
②目指す児童・生徒像	場面に応じて、必要なコミュニケーションがとれる生徒。
③授業のねらい	B目的意識一オ「自ら設定した目的に応じて、効果的なコミュニケーションの方法を選択している。」
④身に付けさせたい力	情報の集め方、整理の仕方を考えながら活動する中で、自らの状況を把握しながら行動できる力。

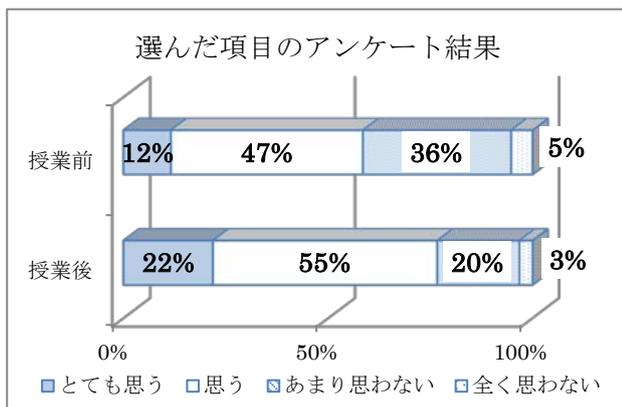
⑤「観察表」の記入内容	話し合いの場で結論を出す際に、多数決などの安易な方法に頼らなくなる。
⑥学習指導案	既習事項である歴史上の人物や社会情勢の情報と、一人ひとりに与えられた別々の情報を同じグループのメンバーと収集・整理し答えを導き出す。

授業者は、日本史Bにおける「古代国家の形成について既習事項を確認する」というねらいと、「B目的意識一オ」の二つを実現できるような授業を考案した。それは、与えられた情報を、収集するべきか、分類するべきか、一つにまとめるべきかを、生徒自身が、場面に応じて判断しなければならない状況が、必然的に作られる活動である。

当日は、それぞれの情報を糸口に、同じグループのメンバーと相談したり、日本史の教科書から情報を探したりするなど、主体的に解決策を探す生徒が多く見られた。その結果、振り返りには、「みんなが情報を出し合うことが大切だ。」や「みんなの意見を聞き、項目に分けて話を進めていくことが大切だ。」など、場面に応じたコミュニケーションのとり方についての記述が見られた。

(3) アンケート結果より

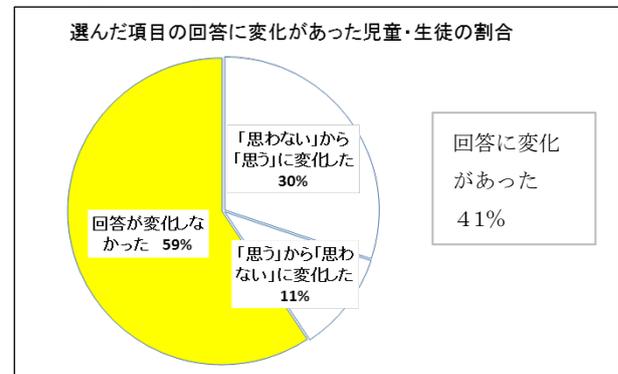
授業のねらいとして「観点表」から選んだ項目について、検証授業を行った199名の児童・生徒に、どの程度できているかを、授業前と授業後のアンケートにより質問した。その結果、「とても思う」と「思う」の割合が、授業前より増加した(第3図)。授業者が、「観点表」から選んだ項目について、児童・生徒の気付きを促すような授業づくりをした結果、授業のねらいを実現したと感じる児童・生徒が増えた。



第3図 選んだ項目のアンケート結果

また、授業前と授業後で回答が変化した児童・生徒の割合は、41%であった(第4図)。この中には、「思う」から「思わない」に回答が変化した児童・生徒も含まれている。その児童・生徒の記述内容を見ると、「今まで話しかけていいのか迷っていたけれど、どんな話しかけ方をすれば良いか分かった」や「みんなで話し合ってみて、意見をまとめるのはすごく難しいと感じた」などの意見が見られた。これらは、新しい発

見をしたり、不得意なことを自覚したりするなどして、自分自身のコミュニケーションのとり方に気付いた姿と言える。また、回答が変化しなかった59%の中にも、自分自身のコミュニケーションのとり方に関する記述が見られた。このことから、アンケートの数値の変化だけではなく、記述の内容からも、児童・生徒が、授業のねらいを実現しているかどうかを判断できることが分かった。



第4図 選んだ項目の回答が変化した児童・生徒の割合

(4) 検証授業の成果と課題

学校の教育活動の中で、コミュニケーション能力を意図的に育成するために、協力員が実践した検証授業を分析した結果、次のような成果が見られた。

まず、コミュニケーション能力の「何を」育成するかを、児童・生徒の実態と授業者の思いを基に決定したことである。その結果、授業者が、児童・生徒に対し日頃感じている、「こうなってほしい」という具体的な姿をイメージしやすくなり、それを実現するための活動案を考えやすくなった。曖昧になりやすいコミュニケーション能力育成に向けた授業のねらいをより具体的に設定することができた。

また、コミュニケーション能力を「どのように」育成するかについて、授業者が具体的なイメージを持って授業づくりを行えたことも成果である。授業の中で「こう思ってもらいたい」、「こう気付いてほしい」など、児童・生徒の具体的な姿を常に意識しながら、授業づくりを行った。その結果、「分かりやすい発問」や「取り組みやすい活動」が展開され、児童・生徒の主体的な活動を引き出すことができ、コミュニケーションのとり方についての気付きにつながった。

さらに、授業前のアンケートを実施する段階から、児童・生徒に「コミュニケーション能力を高めるための授業」を行うことを伝えたことも成果である。児童・生徒は、コミュニケーション能力を育成されることを授業前から知らされ、授業の冒頭には、コミュニケーション能力の「何を」学習するかを、本時のねらいとして具体的に提示されている。そのため、学習するコミュニケーション能力について、意識しながら授業に参加することができた。その結果、ねらいに則した気付きや発見につながった。

しかし、児童・生徒に「どのような姿が見られたら」コミュニケーション能力を身に付けることができたかを判断する方法については課題が残った。アンケート結果や記述内容から、児童・生徒のコミュニケーションのとり方に対する気付きを見て取ることはできたが、行動の変容を判断するための「観察表」を十分にいかすことができなかつた。それは、観察する期間中に、授業で学んだコミュニケーション能力を活用する機会が、児童・生徒に与えられなかつたことが原因として考えられる。今後は、児童・生徒に、学んだコミュニケーション能力を活用するための機会を、学校の教育活動の中で設定することと、授業での「気付き」を意識させ続けるための方策が必要であると考えた。

また、「観点表」の項目についても課題が残った。協力員から、「項目の内容の中に、具体的な活動案をイメージしづらい部分がある」との指摘があり、授業づくりの際には、具体的な活動案を示し理解を促した。どの教員にも「観点表」を活用しやすくするために、具体的な活動案を示すことなく、「観点表」から活動案をイメージできるよう改善が必要である。

そして、それぞれの協力員が、「観点表」の1項目のみを検証したため、10項目のうち4項目の検証が行えていないことは、今後に向けての課題である。

研究のまとめ

1 成果

本研究の成果は、児童・生徒のコミュニケーションのとり方の実態から、育成すべき能力とその具体的な内容を「観点表」に整理したことである。また、授業づくりから、ねらいの実現状況を判断するまでの手順を具体的に示したことである。さらに、その手順を検証し、有効な手立てであることを示したことである。

これらのことから、児童・生徒に必要なコミュニケーション能力を、学校の教育活動の中で、意図的に育成できることを実証した。最後に、コミュニケーション能力の育成をすることにより、同時に児童・生徒の主体的な取組を促したり、児童・生徒理解を深めたりすることができたことから、教員のコミュニケーション能力育成への意欲喚起につながったことも成果として挙げる。

2 課題

本研究を通して、学校の教育活動の中で、意図的にコミュニケーション能力を育成することについて、個々の教員に対する具体的な手立てを示すことができた。しかし、研究を進める中で、個々の教員の取組だけでは、学校生活の様々な場面で児童・生徒にコミュニケーション能力を育成したり、特別活動に計画的に育成の時間を取り入れたりすることは困難である

ことが分かった。改めて、組織的な取組の重要性を感じた。今後は、年間計画に組み込む方法や、教科を横断して育成する方法など、コミュニケーション能力の育成をどのように組織的に取り組むかを考えたい。

おわりに

コミュニケーション能力は、個人差はあるが、学校行事や学校生活の中で、副次的に育成されていると述べた。しかし、たとえ育成されていたとしても、その能力を身に付けたという自覚が、児童・生徒になれば、社会で活用することは困難である。

そこで、コミュニケーション能力も、教科の学習と同じように、ねらいを持って育成したいと考え、研究を進めてきた。児童・生徒が、社会に出た時に、学校で、「経済を学んだ」、「文章の書き方を学んだ」というように、「コミュニケーションを学んだ」といえるようになることを目指したい。

最後に、御多用の中御尽力いただいた協力員の6名の先生方と所属校の皆様、並びに所属の教育事務所及び教育委員会の皆様に厚く御礼申し上げたい。

[調査研究協力員]

二宮町立山西小学校	教 諭	赤羽 裕子
開成町立開成小学校	教 諭	荒野 泰宏
厚木市立林中学校	教 諭	金子 光宏
藤沢市立高倉中学校	総括教諭	繁里 勇
県立小田原高等学校	教 諭	厚美 香織
県立大和南高等学校	教 諭	峯 一路

引用文献

文部科学省 2011 「小学校キャリア教育の手引き（改訂版）」

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/1293933.htm (2015年4月取得)

高橋真知子 2010 「企業・学校・サークル あらゆる組織の円滑な運営のために 組織を動かすコミュニケーション力」 実教出版 P.18

参考文献

コミュニケーション教育推進会議 2011 「子どもたちのコミュニケーション能力を育むために～『話し合う・創る・表現する』ワークショップへの取組～（審議経過報告）」

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/23/08/_icsFiles/afiedfile/2011/08/30/1310607_2.pdf (2015年4月取得)

北海道立教育研究所 2013 「児童生徒のコミュニケーション能力の育成に関する研究」 研究報告書

http://www.doken.hokkaido-c.ed.jp/?page_id=217 (2015年4月取得)